

男爵本多政以の思想と事業

——泊園学と禅宗——

横山 俊一郎

Baron Honda Masazane's Thought and Business

—Hakuen and Zen school—

YOKOYAMA Shunichiro

In this paper, I consider about the thought and business of Honda Masazane who founded the silk industry in Kanazawa, in order to understand the personality of businessmen from Hakuen-Shoin. I take up his biography named “*Danshaku-Honda-Masazane-Den*”.

As a result of this study, I found that he was inclined toward Buddhism after he graduated from Hakuen-Shoin. But, I think that he upheld the practical aspects of Confucianism. Also, I noticed that Sumitomo's managers participated in the Zen group to which he belonged at that time.

キーワード：泊園書院、本多政以、葵機業場、照顔講、実業家、禅宗

はじめに

大阪の泊園書院は近代日本の工業化を支えた多数の実業家を輩出した漢学塾であるが、彼らを取り上げた研究はほとんど見当たらない。そこで本稿では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、石川県金沢市の実業家本多政以を取り上げ、泊園書院出身実業家の性格を知る手掛かりとしたい¹⁾。

明治期において政以が泊園書院で学んだことは、彼の事績が記された伝記類を見ると明らかであるが、明治38（1905）年初頭刊行とされる『第拾五六回泊園同窓會誌』〔LH 2 / 丙96-15/16〕（編集兼発行者は不明）附載の門人名簿『登門録』にも彼の姓名が確かに記されている²⁾。また、彼が退塾後も泊園書院と

1) 『日本全国商工人名録③』明治31年（渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成Ⅲ』柏書房、1984年、95頁）によると、地価額だけで見れば、政以は石川県金沢市内で二番目に大きい地主でもあった。

2) 『登門録』「石川県金沢市本多町」42頁。また、弟政由の姓名も併記されており、その住所は政以と異なり「石川県

の関わりをある程度維持しようとしていたことは、当時の院主藤澤南岳の「還暦祝賀會」(1902年)に「門生」の祝儀寄贈者として参加している点から見てそのように推察することができる³⁾。

一方、彼の就学状況については、塾生の毎月の成績表であった『生員勤惰表(勤惰月旦評)』〔LH2/丙101-1~101-8〕によって推測することができる⁴⁾。それによると、政以は明治13(1880)年5月に本多家学友の青木勇三郎、島崎文三郎とともに六等生として初めて記されている⁵⁾。それ以降、政以は翌明治14(1881)年5月まで隔月で六等生のままであるが、翌月になると五等生に昇級している⁶⁾。しかし、同年7月は成績表それ自体が欠落しているため、政以の就学状況は不明であるものの、翌月には彼の姓名は勤惰表から消えている。

本稿では、上記の就学環境にあった政以の略歴を明らかにしつつ、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』(葵園会、1924年)所収の書簡や回想を中心に分析することにより、彼の事業活動の背後にある倫理性如何という問題について幾らか接近することを試みる。

一、政以の略歴

本章では、石川県金沢市における泊園書院出身者の一人、政以の略歴について、「家系と父親」「修学と交友」「事業と役職」の三節に分けて見ていきたい。典拠とする資料は、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』(葵園会、1924年)所収の伝記と回想である。

1. 家系と父親

政以は幼名を資松、字を公行といい、初め二山と号し、長じて恕斎・玄玄庵主人・夢夢庵主人の号を用いた。加賀藩主前田家の筆頭家老本多家の長男として元治元(1864)年10月21日に生まれる。加賀本多家は徳川家康の重臣本多正信の次男本多政重を家祖とした。政重は慶長7(1602)年加賀藩の初代藩主前田利長に仕えて三万石を賜わり、いったん致仕するものの、慶長16(1611)年再び帰仕して二万石を加増され、併せて五万石を領する前田家筆頭家老となる。政重の子孫はその職禄を代々相続し、政以

金沢市下本多町六番丁」とある。なお、『登門録』は吾妻重二編『泊園書院歴史資料集』(泊園書院資料集成1、東西学術研究所資料集刊29-1、2010年)に影印されている(447~460頁)。LH2以下は関西大学総合図書館の請求記号である。

- 3) 「還暦祝賀會」については、明治36(1903)年刊行の『第拾四回泊園同窓會誌』〔LH2/丙96-14〕(編集兼発行者は篠田栗夫)を参照。
- 4) 『生員勤惰表(勤惰月旦評)』は全八冊の藤澤南岳筆による大和綴じの横本であり、罫線によって上下四段に分けられ、等級と学生の姓名が記載されたものである。ちなみに、等級は二等上から九等下まで分けられ、三等以上が高等とされた。「本多政」という表記が見られるのは、明治12(1879)年1月から明治15(1882)年12月までの成績が記された二冊目と、明治17(1884)年1月から明治19(1886)年12月までの成績が記された三冊目であるが、後者についてはその等級が八等上から始まっているため、政以の弟政由の分であると考えられる。
- 5) ただし、同年の3月と4月の成績表が欠落しているため、明治13(1880)年5月が政以の正確な入門時期とは断定できない。
- 6) その間、明治13(1880)年の6月と7月には「不勤過一月」の印が付されている。

はその十二代目であった。

父政均は明治維新の際、加賀藩の藩政改革を計画して誤解を招き、明治2（1869）年刺客のために殿中で暗殺された。そのため、政以は同年わずか六歳で家督を相続し、家禄五万石を襲領する。政均には嫡男政以のほか、政由、政正の男子がいた。

2. 修学と交友

明治3（1870）年本多家の儒臣戸水信義に『大学』の素読を教わる⁷⁾。明治8（1875）年前田家の世子利嗣の学友として上京し、一年余り前田家の学問所で学んだ。翌年、維新館という学問所を金沢の本多邸に設け、本多家の儒臣の戸水信義と三宅恒に漢学を、岡本廉三郎のち加藤和平に数学を学ぶこと三年に及ぶ⁸⁾。

のち本多家の学友青木勇三郎と島崎文三郎とともに上京し、勝海舟の指示によって元幕臣の小永井小舟の塾に学んだ。そして同郷の泊園書院出身者大城戸宗重の勧めで大阪に赴き泊園書院に入門する⁹⁾。学ぶこと数年にして学業大いに進んだという。故あって泊園書院を去り、再び上京し、大阪から東京に移った鳥尾小弥太のもとで禅を学んだ¹⁰⁾。明治15（1882）年頃、司法省法学校に通っていた河村善益と交流し始める（後述）。明治16（1883）年鳥尾は元幕臣の山岡鉄舟とともに仏教各宗の合同統一を目的とする明道教会を起したが、政以をその幹事とした。

河村の紹介で鎌倉円覚寺の今北洪川和尚と知り合い、河村と同じく司法省法学校の学生であった秋月在都夫とともに禅学の修行をする¹¹⁾。参禅すること数年、いったん帰郷したのち、京都に出て相国寺の荻野独園和尚のもとで禅学の修行をした¹²⁾。没するまで独園を敬重していたという。明治19（1886）年京都

7) 七博士意見書を発表して日露開戦を主張し、ポーツマス講和会議に反対して停職処分となった東京帝国大学教授の戸水寛人（1861～1935）は戸水信義の長男である。ちなみに、寛人は『男爵本多政以君傳』に回想を寄せている。

8) 志賀重昂らと政教社を結成し、雑誌「日本人」を創刊、国粹主義に基づく社会批判を行った哲学者・評論家、三宅雪嶺（1860～1945）は三宅恒の第四子である。ちなみに、雪嶺は『男爵本多政以君傳』に回想を寄せている。

9) 大城戸宗重（1855～1921）は泊園書院に学んだのち、二松学舎塾頭となり、のち徳島県参事官をへて朝鮮総督秘書官などを勤めた。ちなみに、泊園書院四代院長藤澤黄坡は東京高等師範学校の学生時代、大城戸の家に寄宿している（前掲、吾妻重二編『泊園書院歴史資料集』所収の「泊園人物列伝」参照）。

10) 鳥尾小弥太（1847～1905）は長州藩士の長男として萩に生まれた。戊辰戦争に際しては建武隊参謀として出征。維新後は兵部省に出仕し、陸軍中將、参謀局局长、近衛都督などを歴任した。明治14（1881）年2月軍職を辞し、翌年には初代統計院院長に就任する（宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2012年、899、900頁）。なお、鳥尾は南岳とは囲碁友達の関係にあり、南岳は鳥尾の代表的著作である『得庵全書』（1911年）の序文も書いている（吾妻重二編『泊園文庫印譜集』泊園書院資料集成2、東西学術研究所資料集刊29-2、2013年、175頁）。

11) 秋月在都夫（1858～1945）は日向国児湯郡高鍋村に生まれた。明治17（1884）年7月司法省法学校卒業後、ベルギーとドイツに留学。帰国後、外務省に入省したのち、ベルギー公使、オーストリア特命全権公使などを歴任した。退官後は読売新聞社社長、京城日報社長などを務めた（宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、吉川弘文館、2011年、29頁）。

12) 荻野独園（1819～1895）は備前国児島郡山坂村に生まれた。儒学者帆足万里の門に入って六年間『周易』の研鑽に励んだのち、京都相国寺の大拙承演に師事し、明治3（1870）年に同寺の住職となる。廃仏毀釈に対する反対運動を展開、明治5（1872）年の大教院設置に指導的役割を果たした。鳥尾小弥太と山岡鉄舟とは参禅を通じて親交が

転勤となった河村が独園のもとで参禅したため、河村との交流を再開させる。のち前田家の家政上の問題から金沢に帰郷するが、大徳寺の菅広州和尚を春秋両度本多邸に招聘して数年勉強し、独園の弟子で越中国泰寺の和尚道律雪門の洗心会の運営にも尽力した。

3. 事業と役職

明治20（1887）年旧家中貧困者の授産のため、桑園を拓いて養蚕を奨励し、さらに葵工場を創立して生糸を製造する。のち輸出羽二重などの絹織物を製造して「葵機業場」とし、次第にその規模を上げた（後述）。翌年、鳥尾が保守党中正派を組織した際、意見が合わないものの、以前の誼を重んじて、その機関紙『中正日報』の資金を助けたという。また、同郷の泊園書院出身者黒本植とともに本多邸の書院で「照顔講」という修養団体を創立する（後述）。明治25（1892）年日本赤十字社の正社員に列した。翌年、侯爵前田家の家政評議員を嘱され、以来家政を補翼する。

明治31（1898）年石川県農工銀行の頭取に当選する。また、渡瀬政礼らが首唱して設立された金沢実業会の会長に推された。明治32（1899）年石川県重要物産共進会会長に推される。翌年、全国蚕糸業会評議員を嘱され、同年、華族に列して男爵を授けられる。また、伊藤博文に嘱されて立憲政友会の創立委員となった¹³⁾。のち原敬、元田肇、大岡育造らとともに党務に与ったが、明治36（1903）年立憲政友会を脱退する¹⁴⁾。

翌年、近衛篤磨の同志として貴族院議員に当選した。また、金沢商業会議所の特別会員に推され、七尾鉄道会社取締役にも当選する。明治38（1905）年日本赤十字社の特別社員に列した。翌年、鉄道国有案が政府より提出された際、熱心に国有を主張し、交渉委員として各派の間を奔走したらしい。また、横山鉦業部の経営者横山隆俊・章とともに清国・朝鮮を漫遊し、主に産業状態を視察し、清国では大官張子洞の歓待を受ける¹⁵⁾。その帰途、首相西園寺公望に中央の内務行政に親友井上友一が不可欠であることを説いた¹⁶⁾。

あったという（前掲、宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、408頁）。

13) 政以は創立委員をへて総務委員となるが、『男爵本多政以君傳』に回想を寄せた改野耕三によると、当時の伊藤博文から「本部総務の中でも、西園寺と本多とは俺に實印を預けてあるから、安心だよ」と聞いたことがあるという（前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「改野耕三氏（衆議院議員）の談」）。

14) 元田肇（1858～1938）は豊前杵築藩の儒者の家の養子であり、東京大学法学部を卒業後、代言人をへて明治23（1890）年第一回総選挙に当選、のち連続十六回当選を果たした。伊藤博文の新党構想に参加し、立憲政友会結成時には外遊中だったが、帰国後立憲政友会に所属した（宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、649,650頁）。政以とは「政友会を創立以來別懇の間柄で、互に相信し相親しみ、恰も骨肉も只ならざる交際をして居た」という（前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「元田肇氏（鐵道大臣）の談」）。

15) 横山家は本多家と同じく旧加賀藩の家老の家であり、維新後も鉦山業を經營するなど、「石川県及金澤市の地方政界」において本多家とともに前田家を中心にして「鼎立」する「重鎮」であり続け、「當時縣市の當局者が公共の爲に何事が重要な事をなさんと欲せば、必ず先づ本多家及び横山兩家に謀れる」状況であった（前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「高木亥三郎氏（前田侯爵家家扶）の談」）。

16) 井上友一（1871～1919）は金沢藩士の長男として生まれ、第四高等中学校、帝国大学法科大学を卒業後、内務省に入省した。地方行政の専門官僚としてキャリアを重ねたのち、欧米各国の地方自治を見聞したことを契機に地方改良運動と感化救済事業を推進する。その過程で明治38（1905）年留岡幸助らとともに報徳会の創立に参加した。地

明治42（1909）年葵搾乳場を開業する。大正5（1916）年憲政会を組織する桂太郎に誘われたが、議論が合わないので断ったという。同年、実業功績者として石川県より表彰された。また、金沢電気軌道会社の社長に選ばれる。翌年、金沢紡績会社の社長にも選ばれた。大正8（1919）年日本赤十字社より有功章を賜わる。大正10（1921）年没した。晩年は謡曲と仕舞に熱心であったという。

二、徂徠学から臨濟禅へ

本章では、先述した政以の事業活動を支える倫理性を探るため、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』（葵園会、1924年）所収の書簡のうち、政以の大阪・東京遊学時代の恩師である藤澤南岳と今北洪川からの書簡を取り上げてみたい。

1. 「醫匠」としての「君子」——南岳の書簡から

まず、大阪泊園書院の二代院主藤澤南岳からの書簡を見てみよう。題目は「公行本多君歸東京叙」、日付は「明治辛巳冬十一月」とある。書簡の内容からして、明治14（1881）年11月、泊園書院を去る政以に南岳が宛てた書簡であろう。

本多氏加州巨室也。方藩制未更。入則爲主一方。出則爲將三軍。規模恢廓。非庶士之比也已。公行既嗣其家。①奮然學于東京。客歲去來浪花。從余學道。今又歸于東京。蓋有所志云。今也東京之事。紛紜不一。自由黨盛舌戰□世。②公行欲從其後而和之歟。常州兩士獻疏。請脫日本政府法網。②公行欲與其人語以探法律之蹟歟。內閣更制。創院拔才。②公行欲面視其規則歟。舊藩侯某歸其國。有士要之于途。打其從者之面。以辱舊主。②公行欲糾其人以嚴其禮歟。驛遞山林諸局。辭表翻々。②公行欲問而察其情歟。諸士之擬輔廟堂者。橫議紛々。②公行欲厠其議歟。耶蘇術大行矣。右橫聖經。左拜其像者。亦多。②公行欲聽其說歟。清人來寓。文詩唱和。以索交。②公行欲接之以唱興亞歟。余未知其志所在何如。要之。非身習工商口學驛胥。以美其身者也。③先哲有言。曰器者百官也。君子者君與卿也。譬諸良醫用藥。良匠用椎鑿。藥與椎鑿者器也。醫匠者君子也。公行學道二年。豈遽忘之乎。雖然。東京之事。紛紜不一。而公行齡猶弱。眼或有眛邪。今也一別千里。不能朝夕視其行察其志。志之一誤。或養小體。而不自知之。此余婆心之所以不能無惜且恐也。故書以贈之。④願其巨眼察事。巨德御人。以不負其爲巨室焉耳¹⁷⁾。

このように、政以は昨年東京より来阪して南岳に二年の間「學道」したが、今再び上京するという（下線①）。そこで、南岳は政以が上京するに当たって、何か志す所があるのだらうと政以の進路を幾つか推

方自治最大の功勞者とも称される（前掲、宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、174頁）。政以とは「公私共に最親善」な関係で「公事に就ても共に謀りて其志を同ふ」したという（前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「高木亥三郎氏（前田侯爵家家扶）の談」）。

17) 和田文次郎編『男爵本多政以君傳』（葵園会、1924年）8、9頁。欠字については□の記号で示し、誤字については筆者の判断で修正した。

測している（下線②）。それによると、「法律」の探求や「興亞」の提唱、さらには「耶蘇術」の受容に至るまで、南岳は政以の様々な前途を予想している¹⁸⁾。ここで注目すべきは、南岳が「自由黨」の「舌戦」、「内閣更制」による「抜才」など、中央の政官界の動向を把握している事実である。これは南岳が時勢に敏感であったことの証左ともなる¹⁹⁾。

しかし、最後に南岳が政以の訓戒として取り上げたのは、卑近な学問だけでは修身はおぼつかないとして、荻生徂徠『論語微』における『論語』為政篇「子曰君子不器」の注釈の一節であった（下線③）²⁰⁾。それは、「君子」とは「良醫」における「薬」や「良匠」における「椎鑿」のように、「百官」を上手く活用しなければならない。つまり、「醫匠」としての「君子」を志すことであった。また、南岳ははじめに加賀本多家を「巨室」といい、ここで「君子者君與卿也」というのであるから、政以が加賀藩筆頭家老の後継者として政界で活躍することを期待したのであろう。

南岳に言わせれば、政以は「巨徳」による「御人」、すなわち儒教本来の修己治人の原則に沿えばいいのであって、「巨室」であること自体には気負う必要はないのである（下線④）。

2. 「疑團」による「見性」——洪川の書簡から

次に、鎌倉円覚寺の和尚今北洪川からの書簡を見てみよう²¹⁾。題目は「與本多君卮言」、日付は不明である。書簡の内容からして、明治19（1886）年頃、円覚寺を去る政以に洪川が宛てた書簡であろう。

野老隻手ヲ出シテ示シテ曰、①隻手ニ何ノ聲ゾト。是レ心源ヲ悟ツテ、固有ノ寶藏ヲ開クノ妙則ナリ。②此一則疑團ヲ強ク凝ラシテ、靜坐工夫シ玉ヘ。如何ガ工夫ヲ下サン。山河大地、萬像森羅、草木國土、有情非情、只一箇ノ隻手ナリト概想シ、拈提シテ、靜坐ヲ占メ、精彩ヲ著ケテ參究シ去リ、參究シ來レバ、③大死一回スルノ極端ニ至リ、忽然トシテ始メテ隻手ノ妙處ヲ領會スベシ。…④學道モ亦然リ。一則ノ話頭ヲ取テ、單々ニ參究シ、言語ノ道ヲ絶シ、眼眩シ情昏ラミ、心死シ意消シテ、空蕩々虚索々萬仞ノ崖畔ニ□立スルガ如シ。手脚ノ著クベキナシ、去死十分、胸間時々ニ熱悶シテ、忽然トシテ話頭ニ和シテ、心身共ニ打失セン。是ヲ峻崖ニ手ヲ徹スル底ノ時節ト云。豁然貫通シ、蘇息シ來レバ、水ヲ飲テ冷暖自知スル底ノ大歡喜アラン。⑤是ヲ見性ト云。只肝要ハ疑團ノ力ニ依テ、是非々々一回自性ノ本源ニ徹底スベキゾト勵ミ進ミ玉フベシ。⑥疑十分ナレバ悟十分ナリト古人ハ云ヘリ。野老モ壯歳ヨリ實際ヲ踏著セリ。必ズ老僧ガ此示シノ言ヲ疑怪シ玉フベカ

18) 西欧のアジア侵略に対抗してアジア諸国の団結によるアジアの振起・興隆を目的とした興亜会は明治13（1880）年2月に設立されている。

19) 自由民権期・明治時代前期の政党で日本最初の本格的な政党である自由党は明治14（1881）年10月に結党している。

20) 『論語微』卷甲為政篇の当該章には「器者百官也。君子者君與卿也。譬諸良醫用藥。良匠用椎鑿。藥與椎鑿者器也。醫匠者君子也」とある。

21) 今北洪川（1816～1892）は摂津国西成郡福島村に生まれ、はじめ藤澤東咳に儒学を学ぶが、のちに京都相国寺の大拙承演について出家。文久2（1862）年排仏思想を批判して儒仏一致を説く『禅海一瀾』を著わした。明治15（1882）年臨濟宗円覚寺派初代管長に就任する。その思想は儒仏二教一致であり、キリスト教を強く批判するものであった（前掲、宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、189頁）。

ラズ。信根不及ナル時ハ、痛快ニ徹悟シ難シ。勵旃々々。²²⁾

このように、洪川は臨済宗中興の祖とされる白隠慧鶴（1685～1768）が確立した「隻手ノ聲」の公案による修行体系を政以に勧めるのである（下線①）。それには「静坐」しながら「大死一回」する境地へと至る、いわゆる「工夫」が必要であった（下線②・③）。さらに、「隻手」だけでなく「學道」においても、その「工夫」によって「貫通」へと至り、「見性」が得られるのである（下線④・⑤）。最終的に洪川は同じく慧鶴の言葉を引いて悟りには疑いこそが肝要であることを説いている（下線⑥）。

以上のように、政以は君子道を志す徂徠学から精神の修養を志す臨済禅へと傾倒としていったと考えられる。しかし、後述するように、今北洪川は政以と同じく泊園書院で徂徠学を学んだ人物でもある。また、洪川が自らの禅学において儒教と仏教の差別を越えた大道を唱えている。したがって、洪川と政以の禅宗への傾倒は、時代的要請を背景として儒教では補え切れないものを禅宗の中に求めていたのかもしれない。

三、参禅ネットワークと住友の経営者たち

本章では、先述した政以の禅宗への傾倒過程における人的ネットワークとその集団特性を検証するため、政以に洪川を紹介した河村善益の回想を見てみたい²³⁾。なお、河村はのちに関西大学学長となる人物である。

私が本多男爵に御交際を願ったのは、明治十五年頃であります。其時私は櫻井一久君と共に司法省の法學校に居りました。…私は其頃學科の餘暇には、好んで王陽明の書に讀み耽って居ったので、人からは陽明學の狂人のやうに言はれて居ったのです。或時櫻井君が私に本多さんの話をして、是まで本多さんは藤澤の塾で徂徠学をやって居られたが、餘り面白くないといふので、今は鳥尾の所で禅學を修業して居られる。お前の話をしたら是非一度會ひたいと言はれるから、暇があったら會って見たらどうかといふことであつた。…其の時には、（本多男爵と）お互にいろいろ道學上の話をしたのですが、非常に愉快であつた²⁴⁾。

このように、政以は明治15（1882）年頃、泊園書院の「徂徠學」に何かしらの不満を抱いたため、大阪から東京に移った鳥尾小弥太のもとで「禅學」を修業していたという。しかし、司法省法學校の学生

22) 前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』22～24頁。欠字については□の記号で示し、誤字については筆者の判断で修正した。

23) 河村善益（1858～1924）は金沢市に生まれ、司法省法學校を卒業後、京都始審裁判所判事をへて福井地方裁判所長、大審院判事、大阪地方裁判所長などを歴任した。明治27（1894）年から関西法律學校の講師として主に民法を教え、明治38（1904）年第七代学長に就任する。のち東京控訴院検事長などを務めた（関西大学百年史編纂委員会編『關西大學百年史』人物編、関西大学、1986年、113～119頁）。

24) 前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「河村善益氏（貴族院議員）の談」（37、38頁）。

で「陽明学の狂人」とも呼ばれていた河村に面会しようとする。ここで注目すべきは、面会した河村と「道學上の話」において共鳴し合っている点である。河村は続けて次のように回想している。

其頃私は山岡鐵舟先生の所へ行って劍術を學んで居りましたので、山岡の話をしたら、本多さんは、それは面白い、何時か山岡の所へ連れて行ってくれぬかといふことであつたので、其後私は山岡の所へ本多さんを連れて行ったことがある。本多さんは山岡と話をされて大層喜んで居られたことがあります。それから明治十六年の暮から春に掛けて、私は學校の休みの間に、秋月在都夫君と連れ立って、鎌倉の圓覺寺（の今北洪川師のもと）に參禪に行った。…所が本多さんはそれを聞いて、自分も鎌倉に行って見たいから、一度連れて行ってくれぬかと言はれました²⁵⁾。

このように、政以が初めて知り合った河村とは、山岡鐵舟のもとで「劍術」を學ぶと同時に秋月在都夫とともに洪川のもとで「參禪」する人物であつた。そして、政以は彼らが敬重する鎌倉圓覺寺の洪川のもとで修行することになった。こののち、政以は秋月とも関係を構築することになるが、河村は続けて次のように回想している。

鎌倉に着いて、私が洪川老師に本多さんを紹介して初めて會はれたのであります。…洪川和尚は、俺も若い時分藤澤東涯（ママ）の門に在って徂徠學をやつた、徂徠學は心性の事に就ては淺薄だなあ、貴公はよく氣が付いたなあと呵々大笑されたことが、今でも眼に見るやうである。それから正傳庵といふ庵に入って、刻苦勉強されたのであります。…其後私が明治十九年の夏、京都へ轉勤を致しまして。さうして相國寺の獨園和尚に參禪した際、本多さんも相國寺の塔頭に寺を借りて、獨園和尚に就て矢張り大に勉強をして居られた。そこで再び本多さんに御交際を願ふことになった次第であります²⁶⁾。

このように、洪川は泊園書院の初代院主藤澤東咳にのちで「徂徠學」を學んだ人物であつたが、「徂徠學」は「心性の事」に関しては不十分であると指摘している。この洪川の見解に対する政以の解答は不明である。しかし、洪川の見解に共感したのであろう、政以は洪川のもとで「刻苦勉強」することになる。そののち、政以は京都相國寺に移り、荻野獨園のもとで「大に勉強」した。そして、明治19（1886）年の夏、河村とは再び交際する関係となる。

以上のように、のちに関西大学学長となる河村善益の回想によると、政以は陽明學を信奉する河村との関係構築を契機として、今北洪川を中心とする參禪ネットワークに参加するに至つた。その構成員としては、河村のほか、先述した鳥尾小弥太・山岡鐵舟・秋月在都夫らがいるが、とりわけ興味深いのは、秋月の弟鈴木馬左也（1861～1912）はのちに第三代住友総理事、河村の娘婿小倉正恒（1875～1961）はのちに第六代住友総理事を務めており、彼ら住友財閥の経営者たちも上記のネットワークの構成員に含

25) 同上（39、40頁）。

26) 同上（40、41頁）。

まれていたことである²⁷⁾。ちなみに、河村、秋月は後述する織田小覚とともに東洋文化の研究を行う無窮会の設立にも関わっている。

四、照顔講と葵機業場——政以の事業活動の両輪

本章では、政以が金沢に帰郷したのち、自らの事業活動をどのように展開していたのかについて検証するため、政以の修養団体の教え子であり、事業経営の指南役でもあった鶴見左吉雄の回想を見てみたい。なお、鶴見はのちに農商務次官となる人物である。

1. 照顔講の運営

まず、鶴見が回想する政以の修養団体、すなわち「照顔講」の運営について見ていこう。鶴見は政以の「御恩」によって「邪道に迷はず辛ふじて世に立つやうになった」として、次のように述べている。

それといふのは、初めて高等學校に入った時、随分色々な出来事があったのであるが、恰も其時本多男爵の所に照顔講といふものがあって、苟くも郷黨に於て少しく爲すある人或は少しく穎脱して居るといふものは、大抵此照顔講に網羅されて居ったのである。…（照顔講に集った学生は）年齢に於ても非常に相違があるし、又身分に於ても無論相違があったにも拘らず、男爵は其中に交って少しも嫌な顔もされず、諄々として自分の考を述べたり、指導啓發に努められたのである。…（明治二十三年に教育勅語が發布されて以降）一月に確か一回宛開かれたと思ふが、日曜日の朝集ると、第一着に身体を淨めてさうして勅語の捧讀をする。其後で色々な面白い話をする。自分の感想談や互に研究した所を述べ合ひ、意見の交換をしたのである。…それから照顔講は獨りさういふ風に集って色々な意見を交換するのみならず、極めて廉い會費であったが、お互いに會費であったが、お互いに會費を月々出し、それで當時非常に我々に有益であるといふ新刊の書物或は雜誌類を購入して、それを講員に廻覧させる。又時々寄り合つて輪講をする、或は靖献遺言とか或は弘道館記の述義の輪講をしたこともあるといふ風で、講員は始終さういふことに努めたのである。…私は東京に於ても講員の一人であつて、同じ講員たる奥田頼太郎君の神田猿樂町の餘り廣からぬ家に十數人の者が集つて、金澤に於けると同じ主義方針でやり、又同じやうな考を有つて居られる河村善益先生・織田小覚先生などに御出を願ひ御話を承つたのである²⁸⁾。

27) 瀬岡誠「モノづくりの思想と社会的基盤—住友の場合—」（『社会科学』59号、同志社大学、1997年）参照。なお、大蔵官僚、三井銀行専務理事をへて三井財閥の中核を担った早川千吉郎（1863～1921）も上記のネットワークの一員であったが、「東京の早川千吉郎氏と金澤の君とは、肝膽相照し、内外相呼應して、同家重要な事を處せられたり」とあるように、早川と政以とは前田家の家政を支える間柄であった。また、明治44（1911）年彼らは河村善益、織田小覚とともに前田家に禅の師家を推薦することを謀っている（前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「高木亥三郎氏（前田侯爵家家扶）の談」）。

28) 前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「鶴見左吉雄氏（農商務省商務局長）の談」（45～47頁）。

このように、政以は文天祥（1236～1282）の『正気の歌』の一節「古道照顔色」に由来する「照顔講」なるものを立ち上げ、第四高等中学校（以下、四高）の学生を本多邸の書院に招いて話をしていた²⁹⁾。これは一種の道徳精神を涵養する団体であり、別に講義はなかったものの、厳しい制約があり入会は容易に許されなかった。設立には四高に勤める泊園書院の先輩、黒本植が関与していたという³⁰⁾。政以の話には、禪に関する道話が多かったため、学生の中に禪を研究することが流行したらしい。

明治23（1890）年の教育勅語発布以降、講員は道徳に関する所見や時事問題に対する意見を交換することとなり、『靖献遺言』や『弘道館記述義』の輪講も行った³¹⁾。講員は高等中学校の卒業後に上京進学しても、政以と同様の考えを持つ河村善益や織田小覚の話を聞きに行ったという。なお、講員で立身出世した者の中には、中華民国公使となった小幡酉吉や朝鮮銀行理事となった三島太郎がいる³²⁾。

2. 葵機業場の運営

次に、鶴見の回想する政以の事業経営、すなわち「葵機業場」の運営について見ていこう。鶴見は政以の「産業上の事蹟」として、次のように述べている。

自分で工場を設け、平尾といふ人を工場長として、初めは羽二重を織って居られた。或る時羽二重だけでは誠に詰らぬから、何か良い事はないかと私共に相談になったことがある。…将来はどうしても織物の種類を殖して、意匠物なり柄物を出さぬといかぬといふことを申したら、成る程さうだ

29) 以下、「照顔講」の詳細については、前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「松平市三郎氏（日本郵船會社庶務部長）の談」、「木島鋏三郎氏（興業株式會社支店長）の談」、「白石正邦氏（東京府第五高等女學校長）の談」を参照。

30) 黒本植（1858～1936）は石川郡二塚村の農家の養子であり、農事の傍ら藤田容齋に師事して漢学を学び、ついで大阪の藤澤南岳、東京の川田剛、重野安繹に学んだ。のち第四高等中学校、第五高等中学校に勤めた。五高教授時代は三年間夏目漱石と同僚で、互いに交遊した（芳野先一編『石川県大百科事典』、北国出版社、1975年、249頁）。『生員勤惰表（勤惰月旦評）』によると、黒本は明治11（1878）年3月に五等として入門、6月に四等に進級して最上級生となり、翌年4月まで四等のまま在塾した。なお、師の藤田容齋は東咳の門人である（前掲、吾妻重二編『泊園書院歴史資料集』所収の藤澤南岳編『菁莪録』参照）。

31) 『靖献遺言』は貞享4（1687）年刊行の浅見綱齋の編集書であり、書名は「大義に靖んじて身を献げた忠臣の遺した言葉」を意味した。屈平・諸葛亮・陶潜・顔真卿・文天祥・謝枋得・劉因・方孝孺の詩文を中心にその伝記・逸話また朱子らによる賛辞などに併せて綱齋自身の案語が加えられている。のち崎門派の大義名分論・尊王論を示す書として見出された（子安宣邦監『日本思想史辞典』、ペリかん社、2001年、173頁）。『弘道館記述義』は水戸藩士の藤田東湖が藩校弘道館の建学の趣旨を記した「弘道館記」を一句もしくは一節ごとに解説した書。「道」（道義心）のありようを日本の歴史に即して説いたところに特色があり、天皇を中心とする国家秩序を支えてきた国民の道義心を価値基準とし、この基準をもとに神代以来の歴史を記述した。会沢安の『新論』とともに水戸学の思想を代表する文献である（前掲、子安宣邦監『日本思想史辞典』301頁）。

32) 小幡酉吉（1873～1947）は石川県士族の三男として生まれ、明治26（1892）年帝国大学法科大学を卒業後、東亜会の結成に参画、のち外務省に入省して天津総領事、中華民国特命全権公使などを歴任した（前掲、宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、435,436頁）。小幡は「支那から歸って居る時には、本多男爵が滞京せらるゝと、必らず男爵を中心として會を催すことにして居った」という（前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「鶴見左吉雄氏（農商務省商務局長）の談」）。

といふ話で、男爵は非常に熱心で、平尾君であったか京都邊へ視察に出し、羽二重以外の織物のことを研究されて、自分の工場でそれを織り出されたことがある。そんなことも非常に熱心であった。又何か地方で起すに適した産業はないかといふことを始終御尋ねになり、其爲に能く農商務省にも御出になって、商品陳列館を見られて面白いものがあると、斯ういふものは金澤でやれぬかといふことを熱心に研究されたものである。…又支那を旅行されてから、頻りに支那へ輸出するに適當な工業はないかといふことを私共に言っ居られた。…色々御話して居ったのであるが、到底金澤といふ所は、新しい事業は出来ないから、従來ある仕事を何か改良してやる譯には行かぬか、其方法を考へて呉れといふ御話もあった、又斯ういふことも承つて居る。前年何所であったか外國の鑛山か何かをやらうといふやうな計畫があつたやうである。その事柄は忘れたけれども、調べて呉れといふことで調べたことがある。其結果餘り有望でなかつたので止められたが、進んで良ければ海外でも仕事をするといふ風であつた³³⁾。

このように、政以は「羽二重」という高級絹織物の工場を經營して製品改良に「非常に熱心」に取り組み、故郷金沢の産業勃興についても「熱心に研究」している。さらに、清国視察ののち、中國の輸出に適した「工業」を起そうとし、外國の「鑛山」を所得しようとしている。こうした事業展開が可能となつたのは、政以が士族授産のために創業した養蚕業を製糸業、絹織物業へと業態を發展させてきた結果でもあつた³⁴⁾。一方、企業家精神の旺盛な政以は、「近代的企業」の經營にも関与する「実業家的士族」が立ち上げた金沢実業会の会長にも就任するなど、その事業活動は經濟のみならず政治面にまで及んでいる³⁵⁾。

以上のように、のちに農商務次官となる鶴見左吉雄の懷想によると、政以が立ち上げた「照顔講」は、先述した參禪ネットワークと主義方針を共有した修養団体であり、教え子を介して両者は連携する關係にあつた。ちなみに、政以の「照顔講」に触発されてこの參禪ネットワークに参加することになった人物として仏教学・宗教学者鈴木大拙がいる³⁶⁾。

また一方で、企業家精神に溢れる政以の「照顔講」の教え子には実務家として榮達する者が多数おり、さらに企業家精神の旺盛な金沢実業会の会長を通じて金沢の政治經濟面に与えた影響力の大きさは想像

33) 前掲、「鶴見左吉雄氏（農商務省商務局長）の談」（51～53頁）。なお、「本多男爵の工場で造られたものは、非常に品質が良かったのであるといふのは、本多家で悪い物を造つたと言はれると困るから、利益を第二としてやられた」らしく、政以の事業經營では、利益よりも家名の維持が優先された。

34) 塚田凡堂編『家庭の鑑』（北日本社、1935年）所収の「男爵本多政樹氏と葵機業場」によると、政以は当初、士族救済のため養蚕業を目論み、のち明治24（1891）年製糸業を兼営、ついで明治31（1898）年輸出羽二重の製造に転業し、以來、製品種別の転向が著しくなるものの、特殊高級絹織物の生産・輸出については終始滞ることもなく、欧米、印度、中國など世界的に雄飛していたという。なお、本多政樹は政以の長男である。

35) 松村敏「近世城下町から近代都市へ—明治中期金沢市における実業界と市会の動向—」（『經濟貿易研究』25号、2001年）26、30頁。

36) 前掲、瀬岡誠「モノづくりの思想と社会的基盤—住友の場合—」95頁。鈴木大拙は自らが「宗教方面に関心を持つことになった」理由を二つ挙げているが、それは母親の感化と「本多の若主人」の影響があつたという。

するに難くなく、政以が金沢における「物質界と精神界とを合はせたる指導力の一中心³⁷⁾」であったという人物評価は当を得たものといえよう。

おわりに

本稿では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、石川県金沢市の実業家本多政以に注目し、彼の経歴を通して事業活動を明らかにしつつ、その背後にある倫理性如何という問題に幾らか接近することを試みた。

本多家は先祖代々加賀前田家の筆頭家老を務め、その家禄は小大名に匹敵する家柄であった。政以は元治元(1864)年に生まれ、維新期の藩政改革を主導した父政均が殿中で暗殺されることにより、わずか六歳で家督相続するに至る。

政以は幼少期の時点では旧藩以来の教育を受けていたが、青年期になると付添の学友を伴って東京・大阪へと遊学した。途中、東京在住の泊園門人大城戸宗重の勧めにより、明治13(1880)年、泊園書院に入門している。しかし退塾後は、司法省法学校の学生河村善益を介して鎌倉円覚寺の泊園門人今北洪川のもとで修行するなど、臨濟宗の公案禅へと傾倒していく。

帰郷直後の明治20(1887)年、政以は士族授産のため養蚕業を創始し、のち製糸業、織物業へと業態を発展させる基礎を築き、その翌年には四高に勤める泊園門人黒本植とともに「照顔講」という四高生を対象とする修養団体を創立した。

そののち、政以は旧主前田家の家政を与りつつ、経済面では石川県農工銀行、金沢電気軌道、金沢紡績の社長(もしくは頭取)を務め、政治面では金沢実業会会長として金沢市政の刷新に取り組んだほか、立憲政友会の創立を援助し、貴族院議員として鉄道国有化を推進するなど、中央政界でも重きをなすに至った。また、日本赤十字社社員として慈善事業に注力した点も見逃せない。

では、上記のように金沢の「物質界」と「精神界」の両面で指導的立場にあった政以の倫理性とは如何なるものであったであろうか。

まず、政以の思想を特徴付ける出来事として、徂徠学から臨濟禅への傾倒がある。これは洪川のいう徂徠学の「心性の事」の不十分さがその原因であることは、当時の政以が「陽明學の狂人」の河村と共鳴している点から見て、そのように推測できる。しかし、その洪川自身が儒教と仏教の差別のない大道を志している点を見れば、政以は儒教(もしくは徂徠学)を否定したというよりも、むしろ儒教(もしくは徂徠学)を補完するものとして禅宗の一部を取り込んだ可能性が高い。

実際、政以は泊園門人の黒本とともに立ち上げた「照顔講」では、『靖献遺言』や『弘道館記述義』の輪講を実施している。したがって、たとえ徂徠学から臨濟禅への傾倒があったとしても、幕末以来の(徂徠学を中心とする)泊園学を構成した尊王思想や後期水戸学の要素は政以の実践倫理の中核にあり続けたと思われる。

引き続き、近代日本の工業化を支えた多数の泊園書院出身実業家を考察していくが、儒教と他宗教と

37) 前掲、和田文次郎編『男爵本多政以君傳』所収「高木亥三郎氏(前田侯爵家家扶)の談」(31頁)。

の補完的關係にも今後注目していきたい。

※本稿は、科学研究費助成事業研究活動スタート支援「近代における漢学塾出身者の事業活動と実践倫理の研究—大阪の泊園書院を中心として」（課題番号15H06744、横山俊一郎研究代表）における成果の一部である。